

# 数研 AGORA

▶キャリア教育の視点で授業を捉え直す  
／菊井 雅志……1  
▶「地理総合」における GIS 実習 (2)  
／保本 正芳……4

▶特別記事：数研出版 100 周年……7

No.80

この用紙は、再生紙を使用しています。

## キャリア教育の視点で授業を捉え直す —中学校社会科と高等学校地歴科・公民科をどうつなぐか—

宇治市立広野中学校教頭  
菊井 雅志

### 1. はじめに

キャリア教育という言葉を知り、どのようなものを想像するだろうか。言葉そのものは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」<sup>(1)</sup>というように定義され、その必要な基盤となる能力や態度は「基礎的・汎用的能力」として「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つに整理、例示されている<sup>(2)</sup>。

現行の高等学校学習指導要領<sup>(3)</sup>では、キャリア教育についての記述が次のようにされている。

(3)生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科・科目等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が自己の在り方生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。

つまり、キャリア教育とは、生徒の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を学校の教育活動全てを通して育てていくものであると捉えることができる。

このような、キャリア教育の捉え方に立脚すると、学校現場レベルでの学習指導要領との関係は、概ね次のように考えることができよう。

- ・キャリア教育によって育みたい資質・能力は、様々な学びを通して身に付くものであり、かつ、時間をかけて涵養されるものである。
- ・少なくとも、生徒が社会に出た後のことをターゲットにしている点でキャリア教育の視点と学習指導要領の改訂の考え方は一致している。
- ・「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善によって生徒に身に付けさせたい資質・能力に「基礎的・汎用的能力」は含まれている。

以上の点をふまえ、ここでは中学校社会科におけるキャリア教育の視点の取り入れ方の一例を示す。高等学校地歴科・公民科との接続や、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業改善への参考にさせていただきたい。

### 2. 中学校社会科の構造と運用の実際

中学校の社会科は、標準時数として1、2年生で各105時間(週3時間)、3年生で140時間(週4時間)であり、1、2年生で地理的分野(115時間)と歴史的分野(95時間)を、3年生で歴史的分野の残り(40時間)と公民的分野(100時間)を履修する構造になっている<sup>(4)</sup>。また、通常、学年団が1年生から3年生まで持ち上がっていく場合が多いため、社会科教員は分野ごとに変わることはなく、社会科として持ち上がりで担当していくケースが多い。

また、中規模以上の学校で1つの学年を複数の教員で担当する場合、定期テスト等は共通の問題を使用することは勿論のこと、観点別評価のすり合わせ

も綿密に行い、学年で統一した基準での評価・評定を出すようにしている。

### 3. 教科教育におけるキャリア教育の視点

キャリア教育の定義と学習指導要領との関係を読み解くと、生徒に基礎的・汎用的能力を身に付けさせていくためには、特別活動を軸にしながらも、各教科からのアプローチが必要不可欠である。

中学校での例を挙げると、職場体験学習や地域・企業と連携した課題解決型学習(PBL)は主に総合的な学習の時間において実施されるが、その際に必要となる力はそれ以前の体験、経験によって培われるものである。また、物事を多面的・多角的に捉え、判断する必要があるが、各教科の見方・考え方を通して育まれた「思考力・判断力・表現力」によっても支えられていることは言うまでもない。

特に中学校社会科、高等学校地歴科・公民科が扱っている学習内容は、生徒の日常生活に直結するため、他教科よりも「実生活に生かす」という視点多い。ただし、前述の通り、学びを総合的に捉えて各教科の見方・考え方を駆使した活動は、特別活動や総合的な学習の時間(高等学校は総合的な探究の時間)において行われるものであることに留意する必要がある。

よって、各教科において必要なことは、イベント的に生徒が社会に出た際に直面するであろう課題を解決する場面を設定することそのものよりも、その点を特別活動や総合的な学習(探究)の時間に譲ったとしても、そのような場面で教科での学びが活きるような仕掛けを恒常的に仕組んでおくことの方がより重要であると考えられる。そのような点から、「教科教育におけるキャリア教育」というよりも、「キャリア教育の視点を伴った教科教育」といった表現の方がよりイメージしやすいとも考えられる。

### 4. 中学校における具体的事例

#### (1) 授業の考え方

このように、各教科におけるキャリア教育の視点から捉えると、大きなイベント的な取り組みや課題解決型学習(PBL)そのものというより、それまでの授業で教員が意識し続けて必要となる資質・能力にアプローチし続けたか、ということが重要になる。

例えば、キャリア教育によって身に付けさせたい資質・能力とある種近い資質・能力を育むことを目的としている公民科(中学校社会科・公民的分野)

の学習内容に「成人年齢の18歳への引き下げ」という項目がある。主権者教育の一環でもある中で、授業で模擬投票を行おうとした場合、「模擬投票」の1時間分の指導計画を検討するのでは不十分である。年間を通してその授業に至るまでに、生徒にどのような資質・能力を身に付けさせておくことが必要であると考えてその力をまさに涵養してきたか、また、その後の授業で模擬投票を契機としてどのような資質・能力を伸ばしていこうと考えているか、に注目することは模擬投票そのものと同じように大切なことであろう。

そのような点から、小・中学校向け主権者教育指導資料『「主権者として求められる力」を子供たちに育むために<sup>9)</sup>』にあるような、課題解決型学習(PBL)に取り組むことを念頭に普段の授業展開を紹介する。

#### (2) 普段の授業の展開

新学習指導要領において、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善が示されているが、一方で全ての授業で話し合い活動を入れた授業を行う必要はないということも示されている。

中学校の現場ではこの話し合い活動を取り入れた授業展開を導入した際に、ともすれば「活動あって学びなし」に陥る危険性が指摘されてきた。話し合い活動を行う際に必要になるのは、当然、その話し合いに参加する児童・生徒の主体的な参加態度と、考えるための基本的な知識・技能である。単元やまとまりを通して、必要に応じて授業内での話し合い活動を行うが、それを全ての授業で行うのではなく、ある程度の知識やそれを基に思考をする経験と自分なりの意見の蓄積の上で話し合い活動を行えるように考え、1時間の授業の基本的な流れの中には話し合い活動を入れることはしなかった。ただし、単元やまとまりを見通した際の流れの中には課題の提示と話し合い活動を含めた解決策の検討を入れている。

なお、授業の基本形に話し合い活動を入れないことの是非については議論が必要であることは承知しているが、特にこれまでの授業形態から変化させていきたいと考えている教員にとっては単元ごとに話し合い活動を入れることを基本としながら、普段の授業での扱いを緩く設定しておく方が、運用がしやすいと考えているし、実際、筆者はそう感じた。

授業を展開していく際に留意したことは、大きく2点ある。1点目は、中学生という発達段階も考慮した際に、例を示す際は個人や学級に絡めて示し、

「あなただったらどうする？」や「そんな学級の状況だったらどうなる？」等、自分事として考えることを促すようにすることである。

地理的分野であれば、「〇〇の気象条件下に(自分自身が)住むとすれば……」という前置きをつけながら、たとえ自然環境についての授業であっても、「そこに暮らす人々」というような視点を入れるようにした。歴史的分野であれば、組織を学級に例えるなどしながら、一定の条件下でその集団はどのようなことを考えるのか、ということを示し、最終的に自分自身が歴史を作っていく当事者であるということを感じられるように配慮した。公民的分野は、地理的分野、歴史的分野の履修後に授業をすることから、空間、時間を認識した上で現代社会を捉えていけるように意識した。

これらの点は、事象が知識としてのみとどまることなく、他の場面でも活用できるような汎用性の高いものになることや、例え方を通して思考手順を理解し使えるようになることをねらいとしている。

2点目は、毎時間配布する授業プリントの最後に「今日のまとめ」と題して2題、100字程度の文章を書かせる出題をすることである。その題は、

- ①授業内容を論理立ててまとめるもの
  - ②授業内容から自分の意見をまとめるもの
  - ③授業内容から問題点、課題を検証させるもの
- の3つのパターンから、その授業に合った2題を作成し、まとめ・振り返りとして授業の後に取り組むように指示した。

具体的には、地理的分野のグローバル化の進展についての授業では、授業の中で現状や課題点を概観したのちに、次の課題を出した。

1. 日本の貿易黒字を減らしながら、国を発展させる方法にはどのようなことがあるか。考えをまとめよう！
2. 日本が海外に輸出しているサービスを挙げ、今後どのようにすればサービスの輸出が伸びると思うか、考えてみよう！

## 5. 成果と課題

このような授業展開を基本として1年生から授業を行っていくと、3年生になる頃には、授業終了後に課題の内容について質問にくる生徒がいたり、生徒同士で課題の内容についての議論が行われたりするようになってくる。また、週3回ないしは4回、考えをまとめることを繰り返し行うため、3年生の最後の感想では「毎時間大変でした」という感想と

共に、「自分の考えをまとめて、文章にすることができるようになり、小論文などが得意になりました」や、「自分の考えを基に、周りとの議論することが楽しくなりました」という記述をする生徒が多かった。

文章を書くことが苦手な生徒が、自分の考えを深め表現することができるようになる半面、対応しきれない生徒がいることも確かである。個別の視点で対応することにより、少しずつ改善していくものの、そこには多大な時間と労力が必要である。その点は、今後改善を図りながら、より生徒が取り組みやすいものにしていく必要がある。

キャリア教育の視点から捉えると、取り組むことが直接的でない部分もあるが、授業後の議論などから「人間関係形成・社会形成能力」、自己の考えをまとめることから「自己理解・自己管理能力」、さらに課題について最適解を探そうとする「課題対応能力」、課題の中から学んだことを自分の将来に生かす「キャリアプランニング能力」と基礎的・汎用的能力に対して多岐に渡る効果があると考えられる。そもそも、自分の考えをまとめて表現するという「自己理解・自己管理能力」に主眼を置いて取り組んだものであるが、実際にはそれ以上の効果があったということが実感である。

キャリア教育の視点を取り入れた授業展開だけでなく、中学校社会科でこのような実践に取り組んできた生徒が高等学校に入学していくことを知っていただけると幸いである。

## 【引用文献】

- (1) 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月)
- (2) 文部科学省(2011)『中学校キャリア教育の手引き』pp.21-23
- (3) 文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』p.30
- (4) 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)』p.63
- (5) 文部科学省(2022)『小・中学校向け主権者教育指導資料「主権者として求められる力」を子供たちに育むために」[実践編 2.中学校社会科における指導事例 (3)公民的分野「民主政治と政治参加」]』pp.61-73

## 【参考文献】

- ・長田徹監修(2018)『カリキュラム・マネジメントに挑む』図書文化社
- ・国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する資料(中学校 社会)』
- ・酒井淳平(2023)『探究的な学びデザイン』明治図書出版